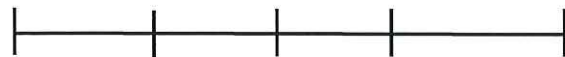
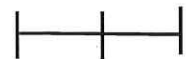


成長発達論 第七回

発達段階のまとめ(おおよその年齢)



口唇期 肛門期 男根期 潜伏期 性器期
(0~1歳) (2~3歳) (5~6歳) (7~11, 12歳) (13歳~)



0歳、1,2歳、3歳
(カオス)(P/Sポジション)(Dポジション)

発達の基本原理・方向性①教科書p64 (参照p68~69)

- ①発達には連続の過程である。
- ②発達は頭部から臀部へ。中枢神経から末梢神経へ。
- ③発達は分化と統合の過程である。
- ④発達は個体と環境との相互作用。

前回の復習

- ・ クライン派(対象関係論)から見た発達について
- ・ より原始的な心の状態の説明と防衛機制について
- ・ 各段階特有の不安のあり方について

発達段階	危機	活力(徳)	
0~1歳	乳児期	基本的信頼vs不信	希望
1~3歳	幼児前期	自律性vs恥	意志
3~6歳	幼児後期	自発性vs罪悪感	決意
6~12歳	学齢期	勤勉性vs劣等感	有能感
13~22歳	青年期	同一性vs同一性拡散	忠誠
22~40歳	初期成人期	親密性vs孤独	愛
40~60歳	成人期	世代性vs停滞	世話
65~歳	高齢期	自己統合vs絶望	英知

発達の基本原理・方向性②

- ⑤発達は相互に関連している。
- ⑥発達には一定の順序がある。
- ⑦発達には個体差がある。
- ⑧発達には周期性がある。

スキャモンの発育曲線

- ①リンパ系型：胸腺、リンパ線、扁桃線
- ②神経系型：脳、脳頭蓋骨、脊髄、視覚器(眼)
- ③一般型：骨格、筋肉、循環器、消化器、顎骨、顔面頭蓋、動脈、静脈、血液
- ④生殖器型：精巣、卵巣、性器

原始的反射は生きる術

モー反射	仰向けにして急に落とすような仕草をすると、脚と頭が伸び、両腕がぱっと上がった後戻る。	生後3~4か月頃
歩行反射 (自動歩行反射)	足の裏が平面に触れると歩行するような仕草を見せる反射	生後6週~8週頃
四方位探索反射	口の近くを撫でると、それを探すようにその方向に頭を向ける反射	生後4か月頃
吸嚙反射	本能的に口の縁に触れたものを何でも吸う反射	生後4~7か月頃
嚙下反射	口の中に入った液体を飲み込む反射	生後5~6か月
押し出し反射	舌に触れた固形物を外に押し出そうとする反射	生後5~6か月
手掌把握反射	乳児の下の平に何かに触れると、物を掴もうとする反射	生後3~4か月頃
バビンスキー反射	足の裏を尖ったものでかかとからつま先に向けてこすると、足の親指が甲側に、他の4指が外側に開く反射	1~2歳頃

子供の思考能力の発達 教科書p106

前操作期	(2歳から7歳)	・表象遊び(ごっこ遊び)や遅延模倣(目前に存在しない人の動作や事象の模倣再現)が可能に。 ・自己中心性(図1参照)、アニミズム(無生物、植物等にも人間同様の心や意志があると考える)傾向がみられる。
具体的操作期	(7歳から11歳)	・思考に可逆性(※4)や相補性(※4)が加わり、保存の概念(図2参照)が生じる。
形式的操作期	(11歳以降)	・論理的推論や抽象的推論が可能となり、さまざまな論理形式を使うことが出来る。

- ※1：行為そのものに興味を持ち、繰り返し同じ動作を行うこと。
 ※2：興味ある結果を生じさせる目的で繰り返し同じ動作を行う。
 ※3：目の前に存在しなくても、対象は存在し続けるという概念。
 ※4：一連の操作の結果は、結局元通りという事が、実際にやってみるまでもなく分かるようになる。

発達を支える脳の進化

- ・脳の構造：神経細胞(樹状突起、細胞体、軸索、週末部)とグリア細胞からなる。
- ・胎児の脳は、細胞分裂を繰り返し、出生時には約140億個もの神経細胞を持つ。
(成人：約140億、約チンパンジー：80億、約アカゲザル：50億)
…ちなみに20歳を超えると1日に10万程度ずつ脳細胞は死んでいく。

子供の思考能力の発達 教科書p106

名称	発達段階	時期	行動や思考
感覚運動時期 (0歳から2歳)	反射の練習	誕生時から	・反射反応を環境に適応するため使用する時期。
	最初の習慣	生後一か月から	・第一次循環反応(※1)により新たな習慣(行動)が形成される。 ・Cf:追視、指しゃぶり、自身の行動注視
	見ることと把握の協応	4か月半頃から	・第二次循環反応(※2)が可能になる 見たものをつかむ等、目と手の協応が成立する。
	二次的シエマの協応	8か月頃から	・知能的適応ははじまる。新規な対象・現象への探索行為がみられる。 ・対象の永続性(※3)が成立。
	第三次循環反応と新しい手段の発見	11か月頃から	・新規な現象を偶然見出すと、条件を変えて発生させるように現象を探る。 ・試行錯誤も見受けられる。
	心理的結合による新しい手段の発見	18か月頃から	・表象(イメージ)が発達する。 ・試行錯誤がさらに発展し、発明的な行動が生じる。

図1 自己中心性、3つ山課題

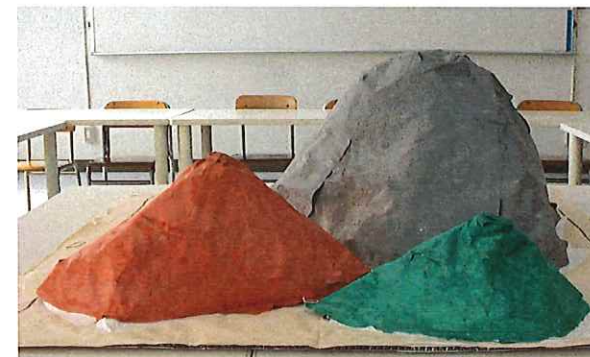





図2 保存の概念

ピアジェの課題	直観的思考段階	具体的操作段階
液量の保存 	子どもはA, Bの容量に等量の液体が入っていることを認め、それからBをCに移しかえたと液面の高さに惑わされCのほうを「たくさんだ」とこたえたり容器の太さに惑わされCのほうを「少しくなった」とこたえる。	子どもはA, Bの容量に等量の液体が入っていることを認める。それからBをCに移しかえたと、液面の高さはわかるが、CにはAと等しい量の液体が入っていることを理解する。
数の保存 	子どもは2つの列の長さや密度のちがいに惑わされて、ならべ方しただいで数が多くも少なくもなると判断する。	子どもは、2つの列は長さや密度が異なるが、ともに同じ数であることを理解する。
物理量と重さの保存 	子どもはA, Bの粘土のボールが等しい量で、同じ重さであることをまず認める。それからBをつぶしてCのソーサー型にすると、大きさのちがいや長さのちがいに着目して、量は変化し、重さもかわるとこたえる。	子どもはA, Bの粘土ボールが等しい量で、同じ重さであることをまず認める。それからBをつぶしてCのようにしても、それはBのときと等しい量でしかも同じ重さであることを理解する。
長さの保存 	子どもは細数の異なる積木を使って、Aと同じ高さの塔をつくらなければならない。	子どもは細数の異なる積木を使って、Aと同じ高さの塔をつくらなければならない。